

「大記」の五重海印説について

佐 藤 厚

一 はじめに 朝鮮華嚴思想の發達は、その初祖である義湘

(六二五—七〇二)の著作である『一乘法界図』(以下「法界図」と略称する)の注釈の歴史とも言い換えられよう。『法界図記叢髓録』(以下「叢髓録」と略称する)も、そのような注釈の一つであるが様々な注釈の集成であるところに特色がある。成立は高麗時代と考えられるが、その主たる注釈である「法記」、「真記」、「大記」は新羅代の成立と見られ、それらは高麗の均如(九三—九七三)にも影響を与えたことがわかつている。故に「叢髓録」の検討は朝鮮華嚴思想史を解明する上で重要である。小論ではその中の「大記」を取り挙げ、その中心思想と考えられる五重海印による『法界図』解釈とそれに付随する教學的問題に着目し、独自の果上現の法門を構築した朝鮮華嚴の特徴を指摘することを目的とする。

二 五重海印 海印三昧は華嚴敎學の中で『華嚴經』の所依の三昧として重視されるものである。この海印三昧に関する所説、すなわち海印論の發展が朝鮮華嚴思想の特徴であるこ

とは木村清孝氏により指摘されている。

いま問題にしようとする「大記」もそのような海印論の一つ、五重海印を中心とする。それは、①忘像海印、②現像海印、③仏外向海印、④普賢入定觀海印、⑤普賢出定在心中及現語言海印の五つである。これは華嚴の法門がビルシヤナ仏の自内証の世界から立ち現われ、普賢がそれを定内で感得し、出定した後それを説示するという、『華嚴經』初会の様相を五つの段階で捉えたものであるということができよう。

「大記」によれば五重海印の成立は智儼(六〇—二六八)に帰せられているが、現存する智儼の文献には現われず智儼作を断定はできない。しかし重要なのは朝鮮華嚴がこれら海印説を智儼作として重要視し伝承したということである。

三 『法界図』と五重海印 「大記」は「法性円融無二相」から始まる『法界図』の七言三十句に五重海印を相当させるとともに、そこに機根論や敎判論も盛り込んで一つの体系を構築する。

図中、『法界図』の三〇句を挟んで上段が義湘自身の科文、下段がそれぞれ五重海印と、機根、教となる。

義湘の科文と五重海印とを見ると両者が対応していることがわかる。義湘の科文も自利行、利他行、修行者方便及得益という構成であり、ビルシヤナ仏の自内証の境界から利他へ、それを感得、修行し、ビルシヤナ仏の境界に入ることとを説いている。五重海印ではこの中の最後の得益の部分こそ説かれていないが同様の流れを持つことは前に見たとおりである。言うなれば五重海印は『法界図』の三〇句の構造を別の形で表現したものとも考えられる。

四 機根論と教判論 まず機根論であるが、これも『華嚴經』の文脈に沿った形で説かれる。忘像海印と現像海印においては機根を提示しないが、仏外向海印には普賢、普賢入定観海印には普賢と縁が深い威光（これは『八〇卷華嚴經』の詠語であり、『六〇卷、華嚴經』では普莊嚴童子）と善財童子が捉え、普賢出定在心中及現語言海印には考流所目の機根が相当するという（大正四五・七二九a）。

次に教判論を見ると、機根論と同様に第一重と第二重において教は明示されないが、第三重には不共別教が、そして第四重には同別二教が当てられている（大正四五・七二九a）。ここで注目されるのは不共別教である。これは同教とは共しないすなわち別教のみの世界と考えられ、中国の華嚴学に

義湘の科文		『法界図』	五重海印	機根	教
自利行	証分	①法性円融無二相 ②諸法不動本來寂 ③無名無相絶一切 ④証智所知非余境	忘像海印（第一重） 観像海印（第二重）		
	縁起分	⑤真性甚深極微妙 ⑥不守自性隨緣成 ⑦一中一切多中一 ⑧一即一切多即一 ⑨一微塵中含十方 ⑩一切塵中亦如是 ⑪無量遠劫即一念 ⑫一念即是無量劫 ⑬九世十世互相即 ⑭仍不離亂隔別成 ⑮初發心時便正覺 ⑯生死涅槃常共和 ⑰理事冥然無分別 ⑱十仏普賢大人境	仏外向海印 （第三重）	普賢 不共別教 無住別教	
利他行		⑲能人海印三昧中 ⑳繁出如意不思議 ㉑雨宝益生滿虚空 ㉒衆生隨器得利益	普賢入定観海印 （第四重）	威光 同別二教	
	修行者方便及得益	㉓是故行者還本際 ㉔息妄想必不得 ㉕無縁善巧捉如意 ㉖歸家随分得寶糧 ㉗以陀羅尼無尽宝 ㉘莊嚴法界実宝殿 ㉙窮坐実際中道床 ㉚旧来不動名爲仏	普賢出定在心中 及現語言海印 （第五重）	所流 所機	

は見られない概念と思われる。

智儼は『孔目章』『融会章』の中で「一乘同別教義、依海印定起」（大正四五・五八六a）と説き、法藏（六四三・七二二）も『五教章』の冒頭で「今將開釈如来海印三昧一乘教義」（大正四五・四七七a）と述べるように、中国の華嚴学では海印三昧とともに同別が並んでいたのであるが、なぜ「大記」では別教だけの世界が構想されたのであろうか。『法界図』を見ると、第十九句に「能人海印三昧中」の一句があり、ここに同別二教を相当させるのは中国の華嚴学に沿った考えである。それ以前の自利行とりわけ普賢に相当する教をどう設定するかが問題となる。そこで自利行の中の縁起分に別教のみの世界を構想することになったのではないか。海印三昧を結節点として、前には自内証から続く別教だけの世界があり、また「大記」には明記されていないが後には所流所目の機根に応じて行く同教の世界が展開していると考えられる。

このように不共別教はビルシヤナ仏から教が流出するという基本構想のもとに『法界図』を解釈する中で要請されたものと考えられる。それでは不共別教という別教だけの世界は「大記」だけの説なのであろうか。

五 無住について 不共別教という概念は「大記」の中で、「不共無住別教」（同・七二九b）、「普賢無住別教」（同・七五三a）、「縁起無住別教」（同・七五四b）、「教分無住別教」（同・

七五四c）という名でも登場する。「無住」という言葉が共通して現われているのがわかる。

この無住という言葉に着目すると、義湘の直弟子である表訓が『法界図』が解釈した五観釈中、「大記」の第三重海印に相当する箇所が無住観とされていることが想起される（同・七二〇c・七二二b）。また『叢髓録』中、「真記」には「無住法性」（同・七二二c）、「法記」には「一乘無住本法」（同・七二〇a）という形で現われ、また均如の『法界図』注釈にも「無住縁起」（韓仏全四・一七c）などの形で「無住」という言葉が高い教えを指し示すものとして使われていることにより、無住は義湘の系統では重視されていたことがわかる。

六 まとめ 「大記」は朝鮮華嚴の中で伝承されてきた五重海印説を『法界図』と重ねて解釈し、機根や教判をも加味しつつ体系を構築した。その根は果上現の法門からの教の流出の過程であり、その中で不共別教ないし無住別教などの独特の概念を生み出した。だが、それは五重海印とともに伝承されてきた朝鮮華嚴教学を総合したものであることを看取することができらるだろう。

〈キーワード〉 朝鮮華嚴、義湘、『法界図記叢隨録』

（東洋大学大学院）